

國學院大學學術情報リポジトリ

一九二七年中国におけるアメリカ留学派遣と北伐に伴う影響について：『申報』記事を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 格子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000889

一九二七年中国におけるアメリカ留学派遣と 北伐に伴う影響について

— 『申報』 記事を中心に —

牧野 格子

一、はじめに

アメリカからの義和団賠償金返還によって始まったアメリカ留学派遣事業は、一九二〇年代にピークを迎えた。筆者はこれまで、一九二三年から一九二六年までの中国におけるアメリカ留学派遣について述べてきたが、本論文では引き続き一九二七年の状況について述べたいと思う。

一九二三年から二六年の状況について、アメリカ留学派遣の歴史を踏まえながら、再度確認する。

中国におけるアメリカ留学の歴史は、十九世紀半ば、十歳前後の男児をアメリカに留学させた幼童留美から始まる。本格的な派遣事業は一九〇五年の清華学堂設立からであった。清華学堂とは、義和団事件賠償金を元手に中国人のアメリカ留学派遣が始まり、その前段階の教育機関とし

て建てられた学校である。学生は六年間英語の準備教育を受けた。

一九一〇年代には、胡適など後の中国歴史・社会に大きな影響を与える人材もアメリカに送り込んだ。この留学派遣のピークは一旦一九二〇年代でピークを迎えた。その後、留学派遣の歴史は今なお続くが、様々な分野で活躍する人材を養成したことで、非常に重要な研究意義を持つ。

拙論より一九二三年から二五年の状況を簡単に述べる。一九二三年は、謝冰心や後にその夫となる呉文藻、そして許地山、梁実秋などが留学した。文学や学術の面においても、重要な人物が送り込まれたことで、非常に重要な年と言えらるう。

一九二四年は、同年六月にアメリカ政府より発布された「移民規制法」により留学派遣事業に大きな影響が出た。

アメリカ入国手続きはより複雑なものとなった。それに伴い留学生数は激減した。⁽²⁾

一九二五年には、五三〇事件が発生した。これは、日系資本工場におけるストライキから反帝国主義運動、ナショナリズム運動へと発展していった。この事件に対し、中国人アメリカ留学生が組織した留美学生会が反応し、一連の抗議活動を展開した。その代表であった桂崇基は帰国後各地で演説活動を行った。この事件への抗議からミッシヨンスクールのセント・ジョーンズ大学から離脱者が発生し、光華大学設立へと至った。⁽³⁾

一九二六年は、上海における政治体制にとって重要な一年であった。それが留学派遣事業に最も現れているのは、留学生への歓送会であった。具体的には、同年開かれた六つの歓送会の内、最大規模となった八月一八日に開かれた環球中国学生会、江蘇省教育会等十団体による歓送会での招待客の構成は一九二六年を象徴するものとなった。⁽⁴⁾

招待客の内訳は留学生だけでなく、アメリカ側からは政治家、税関署員、外交官が参加し、中国側からは行政機関関係者、教育者兼実業家、ジャーナリスト、弁護士などが参加した。ジャーナリスト、弁護士は、当時勃興し始めた中産階級を象徴するものであるし、また多くのアメリカ留

学経験者が出席したことも、中国近代の社会が成熟し始めたことを意味している。

行政機関関係者を見てみると一九二六年の上海における複雑な体制を象徴している。同年軍閥の一人である孫伝芳は敵対する奉天派軍閥を駆逐し、上海とその周辺地域の実権を握った。彼は、淞滬商埠弁公署を設立し、その長に彼の右腕であった丁文江を据えた。

複雑なことに、淞滬商埠弁公署の設立前まで、上海における最高行政機関の長であった滬海道尹・傅彊も出席し、またさらに、北京政府外交部によって派遣された江蘇省駐滬交渉員・許沅も出席した。これら淞滬商埠弁公署総弁、滬海道尹、江蘇省駐滬交渉員の参加は、当時上海の行政の三重構造を象徴している。だが、孫伝芳自身は出席せず、トップに据えた丁文江を出すことで、アメリカ留学派遣事業を重要視していたのだろう。

本論文では、引き続き一九二七年の中国におけるアメリカ留学派遣事業を見ていく。一九二三年から二六年までの同じく、当時上海で発行されていた大新聞『申報』の掲載記事を主に使用する。

本論に入る前に、一九二〇年代のアメリカ留学生数の変化を確認する。

一九五四年に華美協進社 (China Institute in America) が、中国におけるアメリカ留学百周年を記念して作った統計 "A Survey of Chinese Students in American University and Colleges in the Past One Hundred Years, 1954"⁽⁵⁾によると、一九二七年にアメリカの高等教育機関に入学した学生数は、三百二人である。

一九二〇年から三〇年までの入学者数を見ると、一九二〇年三百九十五人、一九二一年三百八十七人、一九二二年四百三人、一九二三年四百二十六人、一九二四年三百八十三人、一九二五年三百四十九人、一九二六年三百四十一人、一九二七年三百二人、一九二八年三百六人、一九二九年、三百四十人、一九三〇年三百十六人である。一九二〇年から入学者数は徐々に増え、一三年にピークを迎え、その後一九三〇年に至るまで徐々に減少していった。一九二三年から二五年までは四十人ずつのペースで減少したが、一九二六年からは、約四十人減少、翌年二八年は微増、二九年は三百四十人に戻すが、三〇年には三百十六人と、四十人以内で推移している。

一九二七年の減少の理由は、清華学校の改組が考えられる。アメリカ留学の歴史は変化の時を迎えていた。清華学校は、一九一〇年代から二〇年代にかけて、アメリカ留学

派遣事業の中心的機関であった。全国から選抜された生徒は八年間の準備期間を経て、卒業後は自動的にアメリカに留学できた。

一九二一年からは、段階的に中等科の募集停止と廃止を実施した。二五年には、大学部と研究院を設置し、大学紹介への改革を着々と進めていった。二八年八月に北伐完成後の国民政府に接収された。清華大学と名を改め、文学院、理学院、法学院と十四の系と研究院を併設した純然たる国立大学となった。二九年に最後の卒業生を出した後は、完全に留学派遣機関としての役割を終えた。

一九二七年の改組準備に伴う一連の混乱については、同年七月から『申報』に関連記事が掲載されている。同年新制の清華大学として入学試験が実施された。場所は北京と上海の二箇所で、従来のアメリカ留学派遣生、男女各五人ずつ計十人を選抜した。その他に新制大学部の新入生百五十人、二年編入生五十人、研究院生(大学院生)二、三十人を選抜した。これら新制教育機関の学生たちは、自動的にアメリカ留学派遣をされることが発表された。従来のアメリカ留学派遣の教育機関から脱皮し、高等教育機関としての大学へと改組された。

だが従来の清華学校在籍していた高校二、三年生に相

当する学生の間に先にアメリカ留学をしようとの動きが出た。⁽⁷⁾ それに対し清華学校及び大学当局が反発し、七月、清華大学当局代表が上海に入り、学生たちに学制改革の説明に当たった。⁽⁸⁾

社会情勢としては、中国近代を根底から変えた国民革命とそれに伴う北伐が前年の一九二六年七月から始まっている。広州から北伐を開始した国民政府軍及び国民党は広州国民政府を打ち立て、その後、武漢国民政府を打ち立てた。

一九二七年の三月に国民革命軍は上海に入城したが、共產党に組織された労働者組織の抵抗にあった。労働者組織弾圧のため、中国国民党のリーダーとなっていた蒋介石は同年四月に上海クーデター（四・一二事件）を起こし、同月一八日に南京国民政府を成立させた。同年五月七日には『上海特別市暫行条例』が施行された。一九二七年は、国民政府下で留学派遣事業が行われたのである。

清華学校内では、同年六月に清華学校国学研究院の教授であった王国維が頤和園の昆明湖で入水自殺をした。自殺の理由はいまだに明確ではないが、この自殺は学内だけでなく、国内にも大きな衝撃を与えた。

以上を踏まえて、一九二七年の状況が実際如何なるものであったかについて、『申報』記事を詳細に見ていくこととする。

二、一九二七年アメリカ留学派遣の状況

① 留学生数の変化

『申報』一九二七年六月から八月にかけての記事によると、この年には、八月四日、八月一日、八月一日に留学生がアメリカへ出発した。八月四日、八月一日は各一人ずつである。最も多くの留学生が出発した八月一日は、清華学校の卒業生と選拔生及び自費生であった。

一九二七年八月一日の記事によると、この年にアメリカへ留学した清華学校生は、六十七人で、うち一九二七年度卒業生が五十一人、二六年度卒業生が六人、選拔専科生が十名であった。

また同年八月二〇日付記事では、留学生に変動が見られた。同月一九日に出発した留学生は合計百四十人で、その内清華出身者は合計七十二人で、その中には二七年度と二六年度卒業生及び選拔生が含まれていた。他に六十八人の自費生がいた。この日の記事によると、船のチケットの代理購入や荷物の運搬は、中国旅行社がすべて行い、総経理の朱成章と船舶部の許兆豊及びその他職員が見送りを受け持ち、大型汽船は楊樹浦港に停泊し、旅客は新閩埠頭か

ら乗船した。渡航者は午前十時と十一時半の二回に分けて乗船し、見送りの人々でごった返していた。船は午後一時に呉松口を出発し、同月二日に神戸、二三日に横浜、九月二日にホノルル、九月八日にサンフランシスコに到着予定だとい⁹⁾う。

昨年一九二六年の留学生数とその内訳を見てみると、合計百六十八人であった。その内、清華出身者は合計七十名で、さらにその内、六十六名がこの年に卒業した学生、四名が前年に卒業した学生であった。他に九十八名の自費生がおり、うち七十九名が男子学生、十九名が女子学生であった。

一九二六年と二七年の留学生数を比較してみると、全体数は二十二人減少した。清華出身者は微増だが、自費生が九十八名から六十八名と大幅に減少している。一九二四年の百二十人（清華生六十人、自費生六十四人）、二五年の百五十五人（清華生八十三人、自費生七十二人）とも比較すると、最も減少した二四年の留学生数に近づいてきている。

表①は留学先での予定している専攻の分布表である。『申報』記事から報道された一部の学生の予定専攻から作成した。大体の傾向が分かるだろう。

経済が最も多く、医学、商科、化学、工程（エンジニアリング）と続き、実学が人気であったことは、中国人のアメリカ留学において毎年見られることである。人文学に関しては、文学が三人、哲学、歴史が各一人ということ、これも毎年見られる傾向である。

《表① 一九二七年中国人アメリカ留学生予定専攻表》

予定専攻	人数	予定専攻	人数
経済	七人	医科	五人
商科	四人	化学	四人
工程	四人	軍事	三人
農科	三人	銀行	三人
鐵路管理	三人	對外貿易	三人
文学	三人	政治	二人
教育	二人	商業管理	二人
教育と心理	一人	運輸	一人
外交	一人	法律	一人
外交と文学	一人	哲学	一人
歴史	一人	新聞学	一人
家政	一人	数理	一人
生物学	一人	牧畜	一人
未定	一人		
		合計	六十一人

(清華学校一九二七年度卒業生、二七年度選抜生を含む。『申報』一九二六年八月一〇日、一四日付記事より作成)

② 清華學校旧制高二・三生のアメリカ留学問題

序章でも少し触れたが、翌年の一九二八年の改組に向けて、入学試験が行われた。アメリカ留学予備教育機関として役割は暮を閉じつつあった。もともと、清華学校は、中等部四年、高等部四年の計八年の学習期間を設けていた。一二歳の年に生徒は中等部に入學し、卒業時には、アメリカの大学の三年に編入できた。八年間の教育では、英語で授業が行われ、伝統的な学問ではなく、新学とよばれる西洋からの学問教育が行われていた。

一九二〇年代初頭から、清華学校学生の資質について問題になり始めた。それは、新学に偏ったために、学生たちの間に中国文化を軽んじる傾向が見られたからである。当時の社会からの批判にこたえるため、幾度となく制度や授業内容の改定を行ってきた。

一九二三年には、中等部の新入生募集を停止し、翌年には中等部二年の募集も停止した。前後して学制改革も数回行われた。中等部、高等部を各三年置き、その上に大学二年が置かれた年もあった。八年間の在籍期間は変わらないが、大学二年を置くことで、授業内容もそれらに合わせてレベルが上げられた。

一九二五年には新制の大学部が発足し、最初の学生が入學した。この年、国学を学ぶ研究院も設置され、旧来のアメリカ留学予備部と合わせて、三つの組織が存在していた。

同時に旧制度のアメリカ留学予備部の大学一年、二年、新制度の大学一年、二年が併存することになり、アメリカ留学予備部の学生が完全に卒業するまで、この現象は続いた。

一九二七年の時点で、高校二年と三年（一九二一年入学と二二年入学）が残っていた。それぞれ一九二八年と二九年にアメリカに留学できる予定だった。しかし、二八年の国立清華大学への改組、北伐の完成がもたらす政治体制の変化によって、旧制生の高二・三生の間には、留学できない危機感が広がった。ゆえに、卒業前のこの年にアメリカ留学に行こうという風潮が高まったのである。彼らとしては、すでに殆どのカリキュラムを終えており、アメリカ留学に十分な学力を有していると考えていたからである。

清華学校当局はこうした風潮に対し誠実に対応した。当時の学長である曹雲祥は、学内の教職員評議会にかけ、再三の議論の末、対象学生八十名をアメリカ留学に送りだすことにした。この留学派遣の費用を新制清華大学の基金から拠出することが決まっていた。旧制生の留学に関しては、義和団賠償金のアメリカからの返還から成り立っていた。

新制生からは新制部の基金に手をつけることに、強い反対が起こった。

その後、同年八月の初めには旧制生の代表が上海に入った。目的は関係各所を回り、誤解をとき、早期解決を促すことであった。実際、旧制度高二・三生代表は、彼らの先輩に当たる旧制大学一年生、清華学校教員や清華同学会の職員に会って、意見を聴いた。その中には、今回の問題は評議会の一部が引き起こした矛盾に原因があるとの意見もあった。新制清華大学の基金からの拠出に対しては、おおむね良好で、反対意見は少数となりつつあった。

議論、折衝の結果、留学問題は解決した。高二、高三生は一九二八年夏にアメリカ留学できることとなった。高三生は従来通り、高二生は卒業より一年早く留学できることとなった。¹⁰⁾

③ 「留美自費生聯歓会」

前年の一九二六年に「留美自費生聯歓会」が設立された。一九二七年も引き続きこの会は運営された。この年に『申報』で報道された記事は一本しかない。しかし、二七年の活動内容に関しては次の通りである。¹¹⁾

一九二七年八月一六日午後三時、環球中国学生会で開か

れた。その年の自費留学生数名、他に環球中国学生会の朱少屏、清華学校のアメリカ留学生が集まった。まず代表の朱鶴年が言葉述べ、朱少屏がその後続いた。他に組織について話し合われ、選挙が行われた。正主席には朱鶴年、副主席には孫啓方、陳伯康、書記に顧毓球、会計に鄭宝寧、遊芸に陳嘉礼、庶務に李堯棠、汪経鎔などが選ばれた。その後、各学生一人ずつ起立し、自己紹介、学校、学科の紹介をし、写真撮影をした後、解散した。

昨年掲載の記事では、「留美自費生聯歓会」は自費留学生の渡航手続きを引き受けたとあった。しかし、二七年の掲載記事では、それは窺い知れない。ただ、自費留学生の情報交換や懇親の場としての機能が書かれているだけである。

③ 歓送会

中国人アメリカ留学生のための歓送会はこの年も行われた。一九二五年から複数の団体が合同で歓送会を開く傾向が強まった。一九二七年は最大数の団体による大規模な歓送会が開かれた。その代わり、歓送会の数は減少した。

さらに、政権が変わったために、歓送会の内容は大きく変化することになった。最大規模となった歓送会は、環球

中国学生会が中心となって開いた歓送会は、この年新たに
 美国大学同学会、復旦大学、上海商科大学、商務印書館を
 加え、

他に一部の学生を対象に、歓送会が行われた。すべての
 歓送会及びイベントを下表に示す。

一九二七年は歓送会がさらにまとめられ、十二団体よる
 合同歓送会が最大規模となった。この歓送会は環球中国学
 生会が中心となって八月一四日に開かれた。清華卒業生、
 自費生が集まり、また多くの要人が招かれ、出席者は合計
 四百人を超えた。

ただ、前年の二六年までから比べると、参加団体に変化
 が見られ、また出席者、歓送会会場にも変化がみられる。
 それまで常連だった江蘇省教育会、清華同学会が外れた。
 清華同学会は別の日に歓送会を開いた。主催者も出席者も
 一九二六年と大きく違っており、二七年当時の状況が見え
 てくる。

一九二七年八月一五日の記事では、中国側出席者として、
 国民政府外交部長の伍朝樞、同外交次長である郭泰祺、そ
 して著名な文学家である胡適が挙げられている。アメリカ
 側の出席者は、アメリカ副領事のソーヤー、保険経済学者
 であるヒューブナー博士であった。

《表② 歓送会表》

	団体	日時	場所	参加者
①	上海清華同学会	六月二日晚	博物院路 三一号怡軒	一九二六年度卒業生、黄学詩、馮燦周、徐芳田、陸坤一、鄭駿全。各年度代表、林瀟源（一九一一年）、施濟元（一九一六年）、王攄暉（一九一七年）、董修甲（一九一八年）、程樹仁（一九一九年）、吳毓驥（一九二〇年）、王昌林（一九二一年）、蔡公椿（一九二二年）王国秀（女子学生代表）
②	清華同学会	八月一三日 午後三時～	香港路四号 銀行公会	新旧男女学生、董修甲、王国秀女士、王慎、百余人。
③	環球中国学生会、 美国大学同学会、 留美同学会、上海 女青年会、南洋 大学、光華大学、 復旦大学、商務 印書館、啓秀女 学校、暨南大学、 持志大学	八月一四日 午後四時 四十分～午 後六時	戈登路二九 号国民政府 外交部長・ 伍朝樞博士 之花園	清華学校卒業生、その他自費生、 伍朝樞、郭泰祺、胡適、鄭洪年、 李登輝、朱少屏、余日章、顧子仁、 劉湛恩、章伯寅、程其保、余陶 秋、梁龍、陳世光、郭德華、吳国 楨、唐映臚、応時、徐佩璜、徐佩 琨、朱榜生、張韻海、楊永清、唐瑛、 藍如涓（程其保夫人）、伍朝樞夫人、 ソーヤー領事、ヒューブナー博士、 啓秀女学の学生、合計四百人

（『申報』一九二七年六、八月記事より作成）

他に、教育関係者として、常連だった環球中国学生会幹事の朱少屏、復旦大学学長の李登輝、さらに教育者の程其保、暨南大学学長の鄭洪年、光華大学学長の張韻海が参加し、政府関係者として、徐佩璜、吳国禎、徐佩琨、キリスト教関係では、余日章、顧子仁、劉湛恩が参加し、弁護士の本務生、国民党関係者として、宋子文の秘書であった唐映臚、が参加したと報道されている。女性の招待客では、啓秀女学から徐婉珊が、商務印書館編集の張継英、そして女優の唐瑛が出席した。

同日の記事にはさらに式次第が報じられている。

①国旗党旗及び総理の遺影に三鞠躬礼をする、②主席の朱少屏が遺囑を読み上げる。③集合写真、④主席による開会の辞、⑤胡適博士、ヒューブナー博士による講演、⑥清華学生、自費学生代表による答辞、⑦邱、容両女史による舞踏、⑧杜庭修による歌唱

①であるが、国旗と書かれているのは青天白日滿地紅旗で、党旗は青天白日旗である。総理の遺影とは勿論孫文の遺影である。さらに、②の遺囑とは孫文の遺言であり、かの有名な「革命尚未成功」を含む文章である。⑦の舞踏については不明である。⑧の杜庭修は国民革命軍少将兼音楽

家であり、一年後に『国旗歌』を作曲した人物である。この時は恐らく、前年の一九二六年七月に頒布された『国民革命歌』を歌ったと考えられる。

講演、学生による謝辞以外は、一九二五年の孫文死後に制定された国民党が制定した儀式である。これは、主催団体の代表である環球中国学生会主席の朱少屏が中国革命党のメンバーであり、元々から孫文に近い人物であったことを考えれば、至極当然なことであろう。他の団体、大学に關しても、国民党の儀式を受け入れることにそう抵抗はなかったことが窺える。

前年の一九二六年は、短命であった孫伝芳政権から淞滬商埠弁公署総弁の丁文江、北洋政府の行政機関からは、滬海道尹の傅彊と江蘇省駐滬交渉員の許沅が出席した。孫伝芳政権と北洋政府が入り組む複雑な状況を象徴していた。

一九二七年は上海が国民政府の支配下に入ったことで、行政機関からの出席者は、国民政府からのみとなった。発足したばかりの南京国民政府からは外交部長の伍朝樞と次長の郭泰祺が出席した。外交部長が出席した理由は、元々清華学校が外交部の管轄にあることが挙げられる。

一九二七年八月の時点で、清華学校の所在地の北京では、まだ北洋政府の支配下にあった。上述の高二、三生の留学

問題では、実際に学生たちが北洋政府の外交部長に掛け合ったとの記事もある。ただ、上海について言えば、南京国民政府の支配下に入ったため、管轄者の代表である、外交部長と次長が出席したのだろう。

④ 歓送の辞

ここでは、歓送会で述べられた留学生に向けての歓送の辞を見てみよう。『申報』一九二七年八月一日の記事はその前日八月四日に行われた歓送会での講演について掲載されている。講演を行ったのは、胡適とヒューブナー博士である。まず胡適講演の内容を見てみる。

胡適自身も一九一〇年にアメリカに留学し、一七年に帰国している。最初に専攻していた農業から、哲学に変えたエピソードを踏まえ、これから留学する学生たちにこうアドバイスしている。

学問には二つの大きな目標があることを知ってもらいたい。一つは社会の需要に応えるもの、もう一つは自身に近いものである。諸君が選んだのは殆ど社会科学に偏っている。但し、社会の需要は非常に多くとも、個人の能力はごく僅かしか發揮できないだろう。個性

を犠牲することは不学と同じだ。(略)ただ専門学問を研究する者は、決して小手先の方法を用いてはいけないうし、また極めて普通のを学んではいけない。(略)学問探求は不朽の業績を求め、より広く、より高みを求めよ。

と、留学中に修める学問について、個性や自己が求めるものを重視せよと述べている。人間の個を重視するという点では、「文学改良趨議」の作者としては、胡適自身の初志を貫徹した言葉といえよう。

また、アメリカからの賓客であるヒューブナー博士は次のように述べている。

国際教育は両国間の理解を促す。私の同学にも学生にも華人がいるため、今回の来華も、非常に歓迎を受けた。諸君がアメリカで学を求めるのに、各校みな歓迎してくれるだろう。然し次の三点には特に留意してもらいたい。①どんな学校でも、いつでもそれぞれの学問について討論できるように、普段から教授に交流しなさい。②本の虫にならないように。一つの学問のほか、できる限り各種の課外活動に参加するよう。③同

窓の有名人の講演会には多く出るように。その有名人がだけが持つ学識を多く獲得するように、云々。

先人のアドバイスに対し、これからアメリカへ留学しようとする学生は如何に答えたのだろうか。自費生代表の陳耀東は次のように答辞を述べた。

外国留学は実学を求めねばならず、決して虚偽の事をして、学位を獲得してはなりません。

ここでの「実学」とは、後の「虚偽」という言葉が置かれていた意味でも、地に足がついた学問という意味だろう。社会の需要に応じるか、個性を重視するか、どちらであれ当時の中国を担う人材であった彼らにとつては、胡適の言葉もヒューブナーの言葉も貴重なものであったに違いない。

三、おわりに

以上、一九二七年出発直前のアメリカ留学派遣状況を見た。同年の留学派遣は、三月の国民革命軍上海入城、四月

の上海クーデター（四・一二事件）を経て、上海の行政機構は国民政府下で行われたのである。アメリカ留学派遣事業は、前年から大きな変化を経たが、土台であった清華学校の改組で、終焉を迎えつつあった。その象徴的な現象として、旧制清華学校高二、三生の抗議活動と歓送会での内容が挙げられる。すべて国民政府軍による北伐からの影響である。南京国民政府の成立後、アメリカ留学が如何なる変化をしていくか、さらなる調査が必要となるであろう。

注

- (1) 拙著「一九二三年アメリカ留學生の姿——『申報』等記事より」〔現代中国〕第七十五号、二〇〇一年一〇月
- (2) 拙著「一九二四年『申報』記事からみるアメリカ留学派遣——「移民法」改正による影響を中心に——」〔國學院中國學會報〕五十八輯、二〇一三年三月
- (3) 拙著「一九二五年中国におけるアメリカ留学派遣とその周辺について——『申報』記事より——」〔國學院中國學會報〕第五十九輯、二〇一三年二月
- (4) 拙著「一九二六年中国におけるアメリカ留学派遣について——『申報』記事を中心に——」〔國學院中國學會報〕第六十一輯、二〇一五年二月

- (5) 阿部洋「解放」前中国における人材養成とアメリカ留学——その「遺産」と現在——（『東亜文化叢書 中国近代化の史的展望』一九八二年、財団法人霞山会）
- (6) 前掲阿部洋、清華大学校史編写組編著『清華大学校史稿』（一九八二年、中華書局）を参考にした。
- (7) 『申報』一九二七年七月二四日付記事「清華舊制高二三生提前出洋風潮」
- (8) 『申報』一九二七年七月二六日付記事「清華代表來滬之任務與工作」
- (9) 『申報』一九二七年八月二〇日付記事「本埠 一百四十學生昨赴美留學」
- (10) 『申報』一九二七年八月一八日付記事「清華出洋糾紛可望解決」
- (11) 『申報』一九二七年八月一六日付記事「赴美自費生聯歡會今日開會」
- (12) 江蘇省教育會は、一九二七年三月國民革命軍の上海入城の後、閉鎖され、その長であった黃炎培は國民黨によって指名手配され、大連に逃亡した。同年六月二二日に江蘇省教育會は、國民政府江蘇省政府によって、江蘇省教育協會に移管された。（蕭小紅「從黃炎培与江蘇省教育會看国家和社会關係的演變（一九〇五—一九二七）」『黃炎培文集二』上海文彙出版社、二〇〇一年、一—三〇頁、『申報』一九二七年六月二六日付「蘇省教育會今日移交協會」）
- (13) 伍朝樞（一八八七年—一九三四年）廣東出身の外交官、天津に生まれる。外交官・伍廷芳の息子。アメリカ・イギリスでの教育経験を持つ。北洋政府、國民黨政府の中で外交畑を歩み、一九一九年パリ講和會議では広州軍政府代表として参加した。孫死後は、蒋介石と対立した汪兆銘、胡漢民を支持した。二八年外交部長辭職後、國民代表の全權代表としてアメリカと条約改正の交渉を行ったが、完全自主權復活は叶えられなかった。一九三一年政界から退いた。（徐友春主編『民國人物大辭典 增訂版』河北人民出版社、二〇〇七年）
- (14) 郭泰祺（一八八八年—一九五二年）湖北省出身の外交官。張之堂の新式學校で学び、一九〇四年官費でアメリカ・ペンシルベニア大学に留學した。一二年帰国後、國民黨に入党。一三年黎元洪副總統の英文秘書として北京に隨行した。一九一八年孫文の護法軍政府に参加し、參事兼外交次長を務めた。一九年王正廷と共にパリ講和會議に参加。一九二七年八月外交部次長に就任。三一年上海停戰協定の締結の際、反対運動参加の學生に暴行された。その後も外交の分野で活躍した。（前掲徐友春）
- (15) ソロモン・S・ヒューブナー（Dr. Solomon Stephen Huebner, 一八八二—一九六四）は、保險經濟學の創始者である。ペンシルベニア大学ウォートン・スクール教授で、保險の価値と必要

性を測る「人間の生命価値」という概念を作りした。また彼は保険経済学を一つの学問として大学教育のレベルまで高めた。ペンシルベニア大学にはヒューブナー研究所がある。一九二七年八月八日付の記事では、ヒューブナーは極東歴訪の途中上海に八月九日に到着予定であったとある。華安合群保寿会社が彼を歓迎し、初めての講演会が開かれた。当時の講演題目は「生命価値的科學管理」であった。江蘇『申報』一九二七年八月八日付「美國保險學專家來滬」、「旧上海的人壽保險業」『上海檔案信息網』http://www.archives.sh.cn/shiy/scbq/201209/20120918_36521.html ヒューブナー著、小林惟司訳『生命保險經濟學』慶應通信、一九六六年)

(16) 程其保(一八九五年～一九七五年)江蘇省出身の教育者である、一九一四年清華学校高等科に入学、一八年アメリカに留学、シカゴ大学を経てコロンビア大学で博士号を取得、帰国後は国立東南大学で教鞭を執った。その後齐鲁大学で職を得た後、東南大学が中央大学に統合されて後、再び復帰した。三二年には教育省に入り、教職と兼任した。(前掲徐友春)

(17) 鄭洪年(一八七五年～一九五八年)広東番禺の出身の教育者である。一九〇六年南京で創設された暨南学堂の初代堂長となった。その後は京漢鐵路局長、北洋政府交通部次長兼鐵路特弁などを歴任した後、二三年から二四年にかけて陸海軍大元帥大

本営財政部次長を務めた。二七年六月に、鄭は国民政府教育行政委員会から派遣され、暨南大学の接収に携わった。国立暨南大学成立後、同大学は南京から上海真如に移された。鄭はこの時大学の初代学長に就任した。同年一〇月から二八年に一月にかけて、南京国民政府財政部次長を務めた。(財政部財政史料陳列室 <http://museum.mof.gov.tw/ct>)

(18) 徐佩璜、字は君陶、江蘇省出身の官僚。一九〇九年第一期アメリカ派遣留学生として、マサチューセッツ工科大学に留学。帰国後は、上海市農工局第四科科长、市政府参事、市教育局局長などを歴任した。また二八年時点で上海特別市参議会の参議に名が挙がっている。三三年から三七年まで国民政府上海特別市政府公用局局长を務めた。(前掲徐友春)

(19) 呉国楨(一九〇三年～一九八四年)湖北省出身の政治家。清華学校を経てアメリカに留学し、プリンストン大学で修士号を取得した。帰国後、政界に入り、江蘇特派交涉員公署の秘書兼交際科科长、外交部第一司副司長兼条约委员会委员、漢口市土地局局长、财政局长、湖北省财政厅長、漢口市長、重慶市長を歴任した。四三年外交部政務次長、四五年国民党中央宣伝部長を務めた。遷台後の一九五三年「呉国楨事件」が起き、台湾省主席などの職を解かれた。

(20) 徐佩琨(一八九二年～一九八〇年)字は叔劉、蘇州出身。上

海財経大学初期指導者の一人。上海交通大学、暨南大学、中山大学、国立中央大学、国立上海商学院教授を歴任した。(前掲徐友春)

- (21) 余日章(一八八二年～一九三六年) 中国基督教青年会全国協会総幹事、中国基督教協進会初代会長。聖公会の牧師の家に生まれた。十三歳の時、聖公会が武昌で創設した文華書院に入り、その後、セント・ジョンス学院に入学した。一九〇八年アメリカ・ハーバード大学に留学し、教育学を修めた。一九一〇年に帰国後は、全国を講演して回る等、キリスト教の活動に尽力した。(李亜丁『華人基督教史人物辞典(Biographical Dictionary of Chinese Christianity)』余日章 <http://www.bdcconline.net/zh-hant/stories/by-person/y/yu-rizhang.php>)

(22) 顧子仁(一八八七年～一九七一年) 上海の聖公会牧師の家に生まれ、セント・ジョンス大学卒業後、中学教員となった。その後、一九一七年中華基督教青年会総幹事、余日章の補佐として、青年会に入った。以後、青年会に属しながら、基督教徒の学生運動に尽力した。一九四八年以降アメリカに移住し、アメリカで没した。享年八十四歳。(李亜丁『華人基督教史人物辞典(Biographical Dictionary of Chinese Christianity)』顧子仁 <http://www.bdcconline.net/zh-hant/stories/by-person/g/gu-ziren.php>)

- (23) 劉湛恩(一八九六年～一九三八年) キリスト教教育者、社会活動家、滬江大学学長を務めた。湖北省の貧しい家に生まれた十二歳の時九江同文書院に通い、この時に敬虔なキリスト教徒となった。その後、蘇州の東呉大学に入学した。一九一八年の卒業後アメリカに留学し、シカゴ大学で教育学士を、コロンビア大学で教育学の博士号を取得した。帰国後は光華大学教授、理事を務め、その後滬江大学学長に就任した。その後教育のほか、上海議会参事などを務めた。様々な抗日活動に従事したが、三八年汪兆銘政府に買収された刺客により暗殺された。妻は婦人運動家の劉王立明。(李亜丁『華人基督教史人物辞典(Biographical Dictionary of Chinese Christianity)』劉湛恩 <http://www.bdcconline.net/zh-hant/stories/by-person/l/liu-zhanen.php>)

(24) 唐腴臚(一八九九年～一九三一年) アメリカ・ハーバード大学を卒業後、一九三〇年に財政部長宋子文の秘書となり、宋からの絶大な信頼を得ていた。一九三一年七月、宋子文を狙った刺客に間違えて殺された。同じくこの歡送会に参加している唐瑛は妹。

(25) 徐婉珊(一八六六年～一九四八年) 広東省出身の教育者。啓秀女子中学の創設者。

(26) 未詳。『上海地方志弁公室』「上海通志、第六節行業組織、新

開団体」に商務印書館の編集として、名前が出ている。(http://
www.shnton.g.gov.cn/node2/node2247/node4598/node79769/
node79780/userobject1ai04424.html)

- (27) 唐瑛 (一九一〇年～一九八六年) 中華民国時期の女優。父はドイツ留学経験のある医師、唐乃安。兄は宋子文の秘書だった唐腴臚。中西女塾を出た後、舞台に立ち、中国語、英語両方でも演じられた。また崑曲を得意としていた。一九二七年八月当時は、上海婦女慰勞北伐將士會が上演した『少奶奶的扇子』で主演を務めていた。女優の陸小曼 (詩人・徐志摩の夫人) との競演で、陸と共に人気を博した。(一九二七年八月五日付記事「婦女慰勞會演劇續聞」)

- (28) 杜庭修 (生没年未詳)。国民革命軍少将、音楽家。『国旗歌』、『中国童子軍歌』を作曲した。(蔡運裕『成為公民…童軍教育的知識與技藝 (一九四五—二〇〇一)』)

〔キーワード〕 中国人アメリカ留学派遣 北伐 清華学校 歓送
会 一九二七年